

歎異抄 第六章

一 專修念仏せんじゆのともがらの、わが弟子ひと

の弟子といふ相論そうろんのさふらうらんこと、も

てのほかの子細しさいなり。親鸞は弟子一人もも

たずさふらう。そのゆへは、わがはからひ

にてひとに念仏をまふさせさふらはゞこそ、

弟子にてもさふらはめ。弥陀みだの御もよほし

にあづかて、念仏まふしさふらうひとを、

わが弟子とまふすこと、きはめたる荒涼こうりよう

のことなり。つくべき縁えんあればともなひ、

はなるべき縁あればはなるゝことのあるを

も、師をそむきてひとにつれて念仏すれば、

往生すべからざるものなりなんどいふこと、

不可説ふかせつなり。如来にょらいよりたまはりたる信心を

わがものがほにとりかへさんとまふすにや。

かへすぐも、あるべからざることなり。自然じねん

のことはりにあひかなはゞ、仏恩ぶつとんをもしり、

また師の恩をもしろべきなりと「云々」。

もっぱら他力の念仏を行っている仲間の中で、あいつはおれの弟子だ、お前の弟子だとかいって弟子を取り合いして喧嘩口論することがあるというこ

とですが、とんでもないことです。私は弟子を一人も持っていない。と申しますのは、私自身のはからいで他人に念仏をさせましたならば、その人は私の弟子ということが出来ましょう。しかし、実際はそうではなく、その人は阿弥陀様の光明に照らされ、阿弥陀様のおかげで念仏を申しているわけですのに、そういう人を自分の弟子だと申しますのは全くところが寒々とする思いであります。師弟の間といえども、前世からの因縁によって定まっている運命、つくべき運命があれば弟子は師につき、離れるべき運命にあれば弟子は師から離れるものでありますのに、師に背いて別の人について念仏をしたら、極楽往生することができないなどというのは、どうにも理解できないことであります。もともと信心は阿弥陀様から賜ったはずなのに、師は弟子が阿弥陀様から賜った信心を、あたかも自分のものであるかのように自分のもとへ取り返そうと思って、そんなことをいうのでしょうか。とんでもない話で、決してあつてはならないことでもあります。阿弥陀様のおはからいにおまかせして、こせこせと知恵を働かすことなく、自然の理に従って生きていますのならば、去っていった弟子たちも、いつかは仏さまの大きな恩を知り、また師の恩を知るときもありましょう。

【專修念仏】ただひたすら念仏すること。

【ともがら】同朋、仲間。

【相論】たがいに言い争うこと。

【もてのほかの子細】思いもよらないこと。

【はからひ】思い定めること。思慮、分別。

【もよほし】催す。うながす。誘う。

【荒涼のこと】あれはててさびしいこと、転じて途方もないこと。とんでもないこと。

【不可説】説くべからざること。言葉も出ないという気持ち。言語道断ということ。

【如来】仏の称号のひとつ。ここでは阿弥陀如来を略していっている。

【自然のことほり】ひとりでにそうなることで、真理そのものをいう。